

数字と事実

専務取締役 田中 久義

ある県の中央会の依頼を受けて、農協の職員の方々を対象とする資格認証試験の財務論を担当させていただいている。それはなかなか厳しい試験体系で、2日間のスクーリングと2回の試験で合否を判定する。全体で約半年かかるなど、受ける方々も大変であろうが、やる方もなかなか容易ではない。

依頼されたときの注文は、農協の経営改善に役立つ実践的な財務論を、ということであった。つまり、正確な財務諸表を作ることを目的とする財務会計ではなく、実践的な管理会計を、というわけである。

この研修の毎年のスクーリングで、必ず、申し上げていることがある。それは、財務会計があるから管理会計がある、ということである。管理会計は、今後の経営の舵取りのために実績を検証するものであり、いわば未来志向である。これに対して財務会計は、外部の人々に経営実績を正確に伝えることを目的として計数として明らかにする。両者の関係は、財務会計が管理会計の基礎であるということであり、管理会計を理解するためには、財務会計が作り上げた計数についての理解が不可欠である。

管理会計に限らず、広く会計の領域で利用される情報は、数字に集約されている。その数字の裏側には、さまざまな事実が隠されており、集約過程で抜け落ちるものもある。このようなひとつひとつの動きが、会計、特に簿記という確立した技術を用いて記録され、蓄積される。したがって数字を読み込むには、その背後にある動きと、記録・加工プロセスについての理解が不可欠となる。

現在の簿記・会計の基本は「複式簿記」にある。この簿記は15世紀にベニスの商人たちが作ったといわれており、15世紀末にはすでに原型が完成していた。たとえば、「貸方、借方」という言葉は当時生まれたもので、それが今でも使われている。

このような簿記・会計が大きな転機を迎えたのは、産業革命であった。これによって、企業が一航海や一取引で終わるものから、永続的な存在へと変化したからであった。これらは「リトルトン会計発達史」に記されている。

この議論には経済学の歴史も重なっている。産業革命以前の生産性の変化はほとんどなく、それが大幅に変化・向上したからこそ産業革命と呼ばれ、経済学が確立したとされる。その経済学も、国民経済計算という数字を扱う技術体系の確立が、その発展に大きく寄与している。実は、この技術のベースにも簿記がある。

われわれは、数字を利用して経済の現状分析や、今後の見通し検討を行っている。現実の経済活動や個人の行動を背後に抱えた数字には、さまざまな癖やアヤが織り込まれ、それが個性を与えている。既成の理論を当てはめて数字を評価することも重要ではあるが、数字がもつ個性とその主張に耳をかたむけて、それを検証していく姿勢も必要であろう。そのためにも、その数字を作り上げている技術を理解しなければならないと思う。